

抑留記

福井県 増田武也

一、出生から入隊

①大正八（一九一九）年十月二十三日 福井県に

生まれる

昭和二（一九二七）年四月 岡本尋常高等小学

校に入學

昭和八年四月 岡本尋常高等小学校高等科に入

學

昭和十年三月 同小学校卒業

昭和十一年四月 鯖江市三工眼鏡製造会社に入

社

昭和十四年十二月 鯖江第三六連隊十中隊に入

隊

昭和十五年十月 連隊旗と共に渡満、新京溝六

七五部隊

昭和十五年十二月 ハルピン第二八八部隊那須

隊

昭和十六年三月 フラルキ第四三部隊片山隊

昭和十六年六月 ハルピン豊五六三四部隊

昭和十七年十二月二十七日 東京東部第六部隊

昭和十八年一月四日 除隊

②父、母、兄、私、弟二人、妹、七人家族

兄弟等五人で眼鏡枠製造工場を造り、それに従事する。

昭和十九年には男四人とも軍隊へ入る。父は病に伏す。

二、ソ連侵攻前

①昭和十九年七月十七日 召集で敦賀連隊中部第

三六部隊入隊

昭和十九年九月 北方派遣催一二六二六部隊

昭和十九年十一月 南千島色丹サキムイ

②色丹島にて一個大隊、今井第一中隊 三田村第

二中隊 内藤第三中隊 牧山機関銃隊 歩兵砲

隊

装備は小銃、軽機関銃、重機関銃、歩兵砲

三、ソ連侵攻

- ①昭和二十年九月一日、色古丹島穴馬港にソ連軍がアメリカの船で威嚇射撃しながら進駐せり。
- ②部隊は終戦と聞き、食糧、武器その他全部日本へ返すべく港に集めたところへ上陸し、トラックに乗り自動小銃で脅しながら今すぐ港に集まれと言いながら島中走り回った。我らは丸腰だから無抵抗で港の広場に集められ、ソ連兵士の監視のもと動くこともできない。

四、終戦

- ①終戦の詔勅は、我ら一個小隊はサキムイの小さな港部落にいて、本部より十五日に無条件降伏と聞き、皆ただ呆然として、これから先我々はどうなるのか、また一度も負けた事もない日本はどうなるのか。

- ②翌日本部に集合して大隊長より「戦いは終わった、今から内地へ帰る用意をする、兵器、食料、全部穴馬港へ運搬するように」と言われ、毎日縄モッコで運んだり色々役割分担をして後片付けに大変だった。

- ③軍からの解放はなかった。

- ④昭和二十年九月一日、色古丹島へ上陸したソ連兵は部隊のトラックを取り上げ、それにソ連兵三人、自動小銃で威嚇しながらそのまま港に集まれと島中追い立て回った。全員港に集合し三日間、港の砂の上で監視され、夜もごろ寝でトイレの外は動けない。その間に使役に出され、港に積み上げた武器、食料を全部船に載せ、我々（ソ連兵）は今から日本へ送る、早く船に乗れと言われ、隊長以下皆乗る。将校は帯刀のままだが、我々は丸腰だった。

- ⑤色古丹島の人達はただ呆然として、何がなんだか分からないようだった。島の朝鮮の人の話では「兵隊さんよ、皆ソ連へ連れて行かれるよ」と話してくれたが本気にしなかった。島民はその時

点では何も被害は受けなかった。

五、シベリア抑留地の旅

①九月十日、ソ連軍の命令で船は真夜中に出港でどこへ行くのか、朝になって見ると南下せず一路北上する。皆ワイワイ騒ぎ出したときはもうマストに機関銃が据えられ、騒ぐなど脅す。大隊長達が話し合いされたが聞き入れられず、十四日に沿海州ソフガワニ港に上陸させられる。

②少し歩かされ、駅で上下二段の有蓋貨車に五十人ぐらいつ「ダワイ、ダワイ」と入れられて、明かりもなく、トイレもなく、いつとなく走ったり止まったり。食事も水もなく、雑囊の中の生米だけ食べてみたがさっぱりだった。中にローソクを持っていた者がいて飯盒の中で炒って食べたが、炒るのに時間がかかりとても駄目だった。駅でない野原で止まるとトイレにダワイと見張り付きで野にする。その時は必ず代わる代わる危険物調べと言って小刀をはじめ時計、

万年筆、葉など取り上げる。隠す所もなく身の細る思いだった。

③何しろ走ったり、駅でなく野原で止まったりで、中は暗く身体は疲れ、うとうととして五日程走ったと思う頃「ダワイ、ダワイ」と降ろされた所は確か沿海州のムーリンで、駄々広い野原に收容所があり、寒い野原に五、六時間余り座られ、一人ずつ名前を書類に書き入れての私物検査。その長い間に持って来た米を飯盒で炊いてみんな腹いっぱい食べたのが最後の思い出だった。後で分かった事だが、ここまでで止まって二、三貨車、また止まって、二、三貨車と降ろされて来たので、皆とはどこで別れたのか分からない。

六、抑留地の生活

①シベリアに第二の鉄道を造るとかで、その線路に沿って收容所を建てて作業をさせたのだ。半年後頃より身体検査で裸にされお尻をつまんで

引っぱられ、その具合で一級、二級、三級を作り、級ごとに作業を変えたり他の収容所へ送られたり、同じ中隊の人達ともばらばらになり、とてもさみしい毎日だった。また、外の収容所もどこにあるのか、また送られて来た者もどこだったかさっぱり分からない。親しい友とも別れ別れになり、もう会う事もできなかつた。

②収容所は新しいが水が出ないので、一キロも遠くから馬車で水を運ぶので炊事用だけで、我らは洗面もお風呂も翌年の五月までできなかった。洗濯もできず着の身着のままだから、皆シラミが発生。それに私は上の段にいたので南京虫に刺され夜も楽に寝られず、またあちらこちらと起き上がりシラミ潰しで大変だった。そのうち衣類の熱風消毒を考え全員行ったが卵は死なない。毎日行つて段々少なくなつたところが今度は陰毛に発生した。中に床屋さんが出て所長に頼みカミソリをもらい剃つてもらつた。入浴は五月頃からできたが桶一杯のお湯で身体を洗う。

それも一週間に一度ぐらいた。ソ連兵が先にお湯を使うので我らは当たりが少ない。発疹チフスはなかつた。

③一つの建物の中に五十人の作業班が四班で二百人、同じ建物が四つあり八百人程と思います。

七、労 役

①約一キロ程歩いたところの林の中に移動ができる薪火力製材所があり、シベリアにもう一本鉄道を造るのだと枕木造りの作業。林の中から馬で丸太を引いてくる者、枕木の長さにピラ（二人引きの鋸）で切る者、ボイラーで枕木を引く者、それを運ぶ者、ボイラーの薪を造る者などいたが、零下三五度〜四〇度になるのでボイラーが冷えると温度を上げるのに大変なので昼夜三交代。夜に当たると寒さが大変。私はボイラー係で温度が上がらないと機械が止まる。乾いた薪を入れると良いのだが、薪造りは外の人達で生木の薪を造るので火力が出ない。上がるま

で休憩でその間暖を取る。監督がノルマが上がらないので怒鳴るが、乾いた木が少ない。ノルマは半分だが寒いので仕方がない。

一カ月程作業すると木がなくなり、二キロ余り歩いて木の切り出しに通う。木を切り倒す者ある長さに切る者、二、三人が肩で線路まで運ぶ者、皆体が疲れているので小さい石や木屑でもつまづくやら、倒れる木を見ても逃げ切れず怪我をする者が出る。時間になってもノルマはできず監視兵は「ダメイ」と言う。監督は「まだ駄目」と毎日のごとく小言、だから帰る。一番辛いのは夜中にその木材を貨車に積み込む作業。寒いのに起こされ二時間程で帰るが、冷えてなかなか寝つかれない。翌日は一時間だけ遅くまた作業に出される事が何回もあった。

②朝八時整列、人員点呼。監督と小銃持ちの兵一人、タポル（斧）、ピラ（鋸）を一人一個ずつ持ち作業所へ。初めのうちはノルマも軽いので早く済ませて休むと「まだ時間があるからやれ」

と、五時までダメイできない。翌日からノルマが増えるので疲れないように時間いっぱいにした。

③ノルマは初めのうちはなかったが、これだけすれば一〇〇パーセントと言われ、では、とがんばって早く三時頃済み休憩すると監督が来て、「まだ時間が来ない、仕事ダメイ」と五時まで休めない。翌日からその分ノルマが多くなる。仕方なく時間いっぱい身体に無理がかからないように考えた。ノルマができた時は人数の四分

の一程、朝の黒パン三〇〇グラムが四〇〇グラム出るが、皆で少しずつ切り分けて食べた。

④監督は一人だから目の届かない者が話し合いで色々工夫した。昨日の木を入れたり昨日の側に積んで誤魔化したりしたが、毎日となるときついで困った。

⑤収容所第一日目は私が食事係長を受けたので各小隊より使役を出し、食事（トウモロコシ）の粉と塩練のスープの分配を行ったが沢山で余る。

余すと明日から少なくともすと言われ無理して食べた。翌日から作業だったが、下痢で大変だった。製材所は移動式のボイラーで薪を焚き蒸気で丸鋸を回す、その運転をさせられた。寒いので板を二重に囲い、中でボイラーの火を焚くので中は暖かい。外の隊員達は薪切りや製材作業で寒い。申し訳ないので代わりたいたいが、運転に馴れた私を口助が代えない。その上ノルマもつけてくれたが皆に分けた。

八、抑留者の統制管理

①一年目の夏頃から全員の体力が落ちたのでソ連の女医の検査があり、裸でお尻の皮を摘まんでみて一級（重労働）・二級（中労働）・三級（軽労働）・四級（オカ、休み）となり、級ごとに組替えて作業をする。

②二年目に入ると一級ばかり集め外のコロナ（収容所）に送ったり、それぞれの作業内容ごとのコロナに送ったり迎えたりで、終戦時一緒にい

た友ともばらばらになってしまった。

③ソ連のやり方は分からない。コロナ内の病室は人数が決まっているのか、凍傷や怪我が大分悪くても入れてくれないが、病室が空だと朝、作業点呼の時医師が見て回り、顔色で何人か入室させる。

④入ソ一カ月程は日本の将校が来て宮城遥拝と体操をしたが、後にはその将校も見なくなった。ただごろ寝で体を休めるだけで気力なかった。

⑤朝夕の点呼は寒いのに五列に並び日本の隊長が数えて報告するが本気にしない。また口助が数えるのに時間がかかり、皆寒いので足踏みすると列が乱れなお分らない。また室内に病人がいても皆出される。今度は五人ずつ離しては数える、時には三十分程もかかる。

作業場への往復にはソ連兵の監視付きで、作業場でも少し遠くへ行くと怒鳴る。またトイレで寒いのでズボンのボタンが手が凍えて掛けるのに時間がかかると怒鳴る。時には空砲を撃つ

て脅す。ソ連兵は簡単に小銃を撃つので驚くばかりです。

⑥着衣は軍服を着たそのまま、作業も夜寝る時もそのまま、着替えもなく引っかけ傷ができても糸もない、汚れてもそのままだった。厳寒になると足はソ連製のベージンキと言う動物の毛を圧縮した長靴で、氷の上でも滑らないで歩ける。また中にボロを巻き、中が濡れると夜干して翌日また使用した。手はウサギの皮で作った親指だけ動く大手袋を着用した。また外套も貸してくれたが大きいのやら長いのやら、また汚れたのやら傷付きやら、情けないものだった。

⑦食事は朝は黒パン三〇〇グラムとトウモロコシの粉と塩鯨のスープを飯盒の中蓋に一杯、そのスープも運次第。初めに貰える時は鯨二切れ程とスープもどろりと濃いのが、後番になると鯨もなくしやぶしやぶで、アムール川の水だとあきれる。昼食は作業場へ大豆ばかり煮た主食が鯖缶に一杯とスープ一杯、夕飯も同じ。その主食

も一週間で小麦ばかりの主食、次は高粱ばかりの主食、次には朮交じりの米食もあった。これが一週間ごとの繰り返しだった。また作業場にてノルマー〇〇パーセント者も監督が名指しで十五、六人あり、その者はパンが四〇〇グラムだが、我が班は全員に少しづつでも分け合って食べた。我らの所は寒くて草も出るのが遅いが、出ると作業場で火を焚くので食べられる。草なら何でも飯盒のスープの中に入れて焚いた。塩分がないので味もないが腹の足しにした。作業場から帰路にソ連の官舎の近くを通るとジャガイモの皮が捨ててあるのを見付けて持って帰り、ストーブで焼いて食べた。皆が見ているので分けて食べたが、自分ながら哀れだった。

⑧休日は日曜ごとにあつたが、皆シラミつぶしと南京虫退治で大変だった。疲れているのでごろ寝して、食物の話やいつ帰れるか分からない話ばかりしていた。私は製材所のボイラー係をしていた。休日になるとソ連のボイラー係が休み

たいが、ボイラーを冷やすと大変困るので、一日中ボイラーの見守りに行った事も何回かあったが、そのたんびに口助の女達が洗濯のお湯をくれと頼むので、作業はしないが中々大変だった。二年目ぐらいから、休日に演芸をやれと言われて歌をうたったり落語したりした。碁、将棋は道具がないのでできない。五、六回はやったが、皆疲れ切っているのだから寝そべって昔の話や食べる話や、いつ帰れるかの話をするだけだった。

⑨板造りの平屋のバラック建、中は土間で、両側に板で上下二段の二人用「幅一二〇センチ」程で、何しろ二人がくっついて寝るベッドに七〇センチ程あけてまたベッドで、それが片側に二十五個ずつで五十個、二メートル余りの通路で二百人、両側入り口にドラム缶を横にした薪ストーブ一個ずつ、石油ランプ三個。ストーブの近くの者は暖かいが、下のベッドや中程の人は寒くて寝られない。ただ疲れて知らぬ間に

寝るだけ。通路に板造りの机を並べて食事はそこで取る。トイレは外に大きなタルを置き、それに足す。全部凍るので翌日使役が出て氷を割り縄モッコで運び捨てる。零下四〇度の外のトイレで体が冷え中々寝られない。大変だった。

⑩民主化教育は、私が二十二年六月ダモイまでは作業の行き帰りに「赤旗の歌」を唄わされたり共産党のパンフを読まされたりした。ソ連には自由もなく土地も家も財産も日用品も全部国からの貸与品で、すべて平等だと見たり聞いたりした。また極寒のシベリアはソ連国の監獄で、我等の收容所の所長も監督も作業員も皆有刑務者で、一番重いのが思想犯で二十五年から二十年、十五年、七年、三年と色々。またここで何か罪を重ねてなかなか家族と共に暮らせない、また「ゲペウ」国の見張り役が絶えず見回るのでウカツに話もできないと、彼ら口助達は皆我らに話す。またここにいるソ連兵も程度の悪いのが回されてくるらしい。日本兵は彼らの日頃

の不満の捌け口になった事になる。

⑪丸一年たった頃より、朝の点呼も作業の点呼も我が隊長がするようになり、寒い点呼も楽になる。特に体の悪い時は隊長の交渉にて多少の休みが取れるようになった。

⑫我が収容所では、なんとしても日本に帰りたいの思いが強かったのか色々事件もあったが、お互いにかばい合ってソ連人には知らせず守り合ったので体罰は知らない。

九、抑留中の生活と極限状態の意識

①二年間、シベリアの地で飢えと寒さと重労働に耐えながら、頭も悪く嘘を平気でつくソ連は良い国にはとうていならないだろう、それに引き換え、負けても我が日本は何と良い立派な国かと思う。無事に日本へ帰り、日本の為に頑張りたいの一心だった。

②ボツダム宣言で終戦になり、自ら武器を捨て無抵抗な我々を強制拉致して寒いシベリアで虫

らのように労働させられ、終戦なんて一度も知らない。我らは新聞もラジオもなく日本国内の事は一切分からず、口助達のデマ話に悪い事しか頭に入らず、神も仏もないのか、何としても体を大事に保ち故郷に帰りたいの一心だった。

③心身共に疲れ果てた我々は、生きる為に身を保つように少しでも食物をと、極寒のシベリアでは夏四カ月程しか虫も草も生きないが、少しでもあれば取りスープに入れ主食の足しにし、また松の苔を取り焼いて食べた。またソ連の官舎のそばを通ると芋の皮が捨ててあるのを見て拾って帰り焼いて食べる。それこそ恥も外聞もなく保身に努めた。

十、帰還

①昭和二十二年四月頃、何回かの身体検査に「オカ」四級で軽作業となり所内の薪造りなどしていたら、お前達は仕事ができないからもう用がない、東京ダモイだと言われた。また嘘と思っ

たが私物をまとめた。

②またどこかの収容所へ回されるのだろうと駅まで歩き、二段の有蓋貨車に乗った。今度は監視兵もなく、私にこの貨車の長になれと指名され、駅、駅で三度の食事に当番を出したり、点呼もトイレも私でできた。また時には外に出して軽い体操もして、何となく明るく二日程で駅に着き、「ダワイ」と降ろされ、見れば海に日の丸のついた船がいる。ナホトカだった。

③船は米山丸で、全員、病人と四級の半病人なので無事乗船できた。

④出港のドラの音で静かに港を離れた時、今度こそ本当に帰れるんだと思わず涙が流れた。全員の悪い人や半病人なので静かだった。また看護婦に聞けば帰還は今年の春からで、病人から先に帰られて、貴方達も早い方ですよと。運良く帰れて、戦友よ、スマナイと手を合わす。

⑤昭和二十二年六月二十二日昼頃、なつかしい日本の舞鶴へ入港、上陸。復員業務を終え我が家

へ。

十一、帰国後の生活

①家に落ち着いて、もう私ははや三十歳だ、人生の楽しい二十歳代は軍隊と抑留者生活でもう戻っては来ない。終戦後で何も無い時、私は次男だからと家を建てる事になり、体を休める暇もなく眼鏡製作と家を建てる基礎造りと大変だった。幸いに四人の男兄弟が皆軍隊へ行つたのに皆無事で帰つたので、力を合わせて何とか生活ができた。

②私は分家なので畳や建具やタンス等何もない。一人立ちで辛い事もあったが、抑留時代の事を思い出してがんばった。なお、途中で眼鏡作業も景気が悪くて、兄弟四人もばらばらに仕事を變えて私一人任せになったが、シベリアの事を思い出せば辛くなかった。また私の家内は、大事な二十歳代にソ連で栄養不良になった身、大事にしないと老後が大変だと食事に色々と気を

配ってくれ、お陰様で大した病気もせず元気で今日を迎えている。

日本には自由あり、希望あり、苦勞が皆自分の財産になる。こんなに有難い国に生まれて何て幸せだと喜んでゐる。

私のシベリア物語

岐阜県 葛口 宗一（旧姓・中村）

地獄・極楽・指の先

十月、十一月と寒くなるにつれ、收容所では飢えと寒さで病人が続出し、作業人員が極度に減少してくると、三カ月ごとに実施される身体検査が、ある日突然実施されることがある。労働係将校は、足りない人間を充足するため、体力回復した人間を一人でも多く確保したいため、その日の作業出発を遅らせ検査となる。

普通で考えられるような健康診断なんてものはない。疾病の発見や、体力の強弱を見て予防措置をとるなんて、そんな生やさしいものでなく、労働の適格性を目的として行われ、自分たちのこれから三カ月の運命を決めるものであると言っても過言ではない。

検査によって一級・二級・三級と区分され、そ